

# 助産専攻の学生が気づいた産婦の支えとなる関わり ～産婦とその家族への接近に焦点をあてて～

Supportive care for a woman in childbirth in the student's awareness  
at midwifery practice : putting the approach to a woman and her family into focus

白石 佳子<sup>1</sup>  
Yoshiko Shiraiishi

## 要旨

本研究では、助産学生が気づいた産婦の支えとなる関わりについて、分娩期の助産学実習を終え、研究参加協力の承諾を得られた学生5名を対象に、半構成的面接法にてインタビューを行い、逐語録を質的記述的に分析した。学生の産婦への関わりは、産婦とその家族への接近に焦点をあてた経験として語られ、【産婦との初対面を意識した態度】【接近時の学生の心情と心構え】【産婦の今の状況への対応と模索】【産婦や家族との関係性構築の手がかりを得る】の4つのテーマが抽出された。本研究は所属大学の研究倫理委員会の承認を得て開始した。利益相反はない。

キーワード：支え、関わり、出産、学生の気づき、助産学実習

Key words : Support, Care, Childbirth, Student's Awareness, Midwifery Practice

## I. 諸言

助産師教育の主たる教育内容である助産学実習の中でも、分娩期実習は、助産専攻の学生にとって主要な課題であり、産婦の支えとなる関わりは、分娩介助技術の提供とともに産婦への精神的支援に関わることから、分娩進行にも影響する。本研究では、助産専攻の学生が気づいた産婦の支えとなる関わりについて、記述し分析することで、助産師教育の方法の改善につながる資料を得たいと考えた。

現在、日本における助産師教育は、大学院、大学、大学専攻科・別科、短大専攻科、専門学校で行われ、助産師教育課程は多様化しており、助産師教育での分娩介助や受け持ち事例への実習の質の向

上については議論がなされており<sup>1) 2)</sup>、現在もこのことは、継続した課題となっている。A大学別科助産専攻においても、助産師教育の方法について、よりよいものを考えていく必要がある。A大学の別科助産専攻では、助産学実習11単位のうち、分娩に携わる実習が6単位（産褥期も一部含む）を占めており、学生は、産婦やその家族との関わりをとおして助産実践を学ぶ機会に恵まれている。A大学の助産学生にとって、分娩期実習での、産婦の支えとなる関わりは、分娩介助技術の習得とともに主要な学修課題である。

近年の少子化や妊娠の高年齢化を背景に、分娩期にケア対象となる産婦は、高年初産などリスクを伴

1 山口県立大学 別科助産専攻  
Yamaguchi Prefectural University, Department of Maternity Nursing and Midwifery

う方も少なくない。また、産婦は自らの出産に主体的に取り組み、より安全で満足のいくものになりたいというニーズが高まっており、助産師には、産婦の望む出産スタイルに応じていくケアが求められている<sup>2)</sup>。さらに、分娩期における産婦へのケアは、分娩介助技術の提供とともに分娩進行に影響し、これらは、産婦自身の出産体験の自己評価に強く関連するといわれ<sup>3)</sup>、産後のうつ傾向や出産後の子育てにも影響するため、助産専攻の学生にとって、分娩期における産婦の支えとなる関わりの経験は重要である。

本研究では、助産学実習の分娩期実習において、助産専攻の学生が気づいた産婦の支えとなる関わりについて明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的帰納的研究

### 2. 研究対象者

A 大学別科助産専攻の学生で研究参加協力の承諾を得られた学生である。

### 3. データ収集期間

2015年9月～2016年12月

### 4. データ収集方法と分析

助産学実習前に研究参加協力のお願いを口頭と文書にて行い、研究参加協力の承諾を得られた学生より直接研究者に連絡をいただき、書面にて同意を得た。インタビュー時期については、実習や学修が支障なく行えるよう、研究参加協力者の意向や都合を伺い、連絡調整を行ったうえで実施した。データ収集は、半構成的面接法を用いて、独自に作成したインタビューガイドを用いて面接を行った。面接は、学生本人の都合の良い日時とし、1回50～60分程度で、場合によっては複数回とした。インタビュー内容は、ICレコーダーに承諾を得て録音した。語られた内容は、逐語録におこし、データ分析は継続的に行い、同類の内容や意味するものと思われるものを抽出し、それらの意味づけを行い、質的に分析を行った。分析にあたっては、研究者のもつ能力やバイアスが結果に影響する<sup>4)</sup>ことから、信頼

性・妥当性を高めるため、以下のことを行った。①面接について、可能な場合は複数回行い、整理、分析した内容について研究参加協力者に確認してもらおう。③母性看護・助産の臨床経験を持つ看護者や研究者と話し合いをもつ。

## 5. 倫理的配慮

研究協力については、自由意思に基づき、同意しても途中で断ることが出来ること、また断ることで不利益を被ることはないこと、研究参加同意後や研究終了後にも、同意の撤回が出来ること、得られたデータは匿名化し、本研究以外には使用しないこと、成績評価には一切関係しないこと、研究成果は学会等で発表することについて文書と口頭で説明し、書面にて同意を得た。面接は本人の都合の良いときに行い、研究参加協力者の拘束感につながらないように配慮した。面接場所はプライバシーを保持できる個室で行い、面接の際、話したくない時や精神的負担を感じる時は申し出ができること、面接終了後も疑問や不安を感じたときは、研究者と連絡が取れるよう連絡先を伝えた。得られたデータについては匿名性を保持し、データ管理は厳重に行った。本研究は所属大学の倫理審査委員会承認(承認番号27-9号)を得て開始した。

## 6. 本研究における用語の定義

産婦の支えとなる関わり：学生が提供したケアあるいは、提供したいと考えたケア、助言、態度、姿勢をいう。

## Ⅲ. 結果

### 1. 研究参加協力者の概要

本研究の参加協力で承諾を得られた助産学生は5名であった。その概要を表1に示す。

### 2. 産婦・家族への接近に焦点をあてた関わり

助産専攻の学生の産婦とその家族への接近に焦点をあてた関わりについて4つのテーマ【 】が抽出された。カテゴリ< >とあわせて表2に示す。以下に、テーマごとに該当するカテゴリに基づきその概要を記述し、研究参加協力者の語り「 」を引用して結果を示す。

表1 研究参加協力者の概要

	A	B	C	D	E
年齢		22	～	37	
看護教育歴	大学卒	大学卒	専門学校卒	大学卒	専門学校卒
看護師経験	無	無	無	有	有
分娩実習施設	産科病院	産科病院	産科病院	産科病院	総合病院
分娩介助例数	11	11	10	10	10

表2 助産専攻の学生の産婦とその家族への接近に焦点をあてた関わり

テーマ	カテゴリー
【産婦との初対面を意識した態度】	<柔らかい雰囲気であゆむ> <陣痛が落ち着いたら自己紹介> <視線を合わせて声をかける> <なるべく自然にとけこめるよう関わる>
【接近時の学生の心情と心構え】	<緊張する、硬くなる、ドキドキする> <わからなさとその戸惑い> <お産に向けての関わりに決意> <産婦の受容と支えについて思索>
【産婦の今の状況への対応とその模索】	<陣痛が強い時の対応とその模索：さする、共感、基本的ニードへの関わり、雰囲気をよむ> <陣痛が弱い時の対応とその模索：産婦の落ち着いた状況を判断、対話の中から得たい情報を尋ねる>
【産婦や家族との関係性構築の手がかりを得る】	<産婦の状況を家族とともに理解> <産婦ケアの実際の紹介と家族の肯定的反応> <産婦へのケア介入に対する家族の了解> <家族からのケア提供者としての承認と受容> <家族による産婦ケア効果の気づき> <家族のケアへの尊重と配慮> <家族のケアを導く> <学生受け入れへの期待>

### 【産婦との初対面を意識した態度】

助産学生にとって、対象産婦との最初の出会いは分娩開始になってからがほとんどであった。ケアの対象者として初めて接する際の挨拶や自己紹介は、雰囲気やタイミングを推しはかり行い、視線を合わせ、状況によっては自然にとけこめるようにという表現で、産婦との初対面を意識した態度について語った。

「陣痛が来ているときだったら、さすったりとかして落ち着いてから自己紹介しました」A

「なるべく（私の）緊張感が伝わらないように柔らかい雰囲気、笑顔で、まずは挨拶からしようというのは心がけていました」B

「初対面なのでやっぱり自分のことを知ってもらうために、自分の名前だったり、なるべく産婦さんの目線の高さといっしょになるように近づいて声をかけたりっていうところから、まずは入っていくようにしました」C

「産婦さんも結構ヒューヒューになっている状態で、自分をはじめましてなので、わりとこう自然にとけこめるように、違和感ないように関わろうと思って・・・」D

### 【接近時の学生の心情と心構え】

産婦への接近時には、緊張する、硬くなる、ドキドキするという心情があり、産婦の状況からどうしようかという、わからなさや戸惑いが生じていた。また語り続ける中で、お産に向けての関わりへの決意や産婦の受容と支えについて思案することが語られた。

「確かにそう、苦しいとかなっている時には、私も緊張しますし、ピリピリしている感じが自分にも移るといって・・・ちょっと硬くなるというか」A

「最初の接近、なるべく緊張感が伝わらないように・・・」B

「緊張してちゃんと話しかけられるかなっていうのもあるし、自分の緊張感が伝わって、お互いぎくしゃくしないようにっていうのは常に考えながら、関わるようにして」C

「産婦さんに会うまでは、正直どんな方か、わからないので、ちょっとこう・・・ドキドキじゃないですけど、どんな方だろうというはあるんです」E

「学生なのでわからない部分があるから、こうきょろきょろはすると思うけど」D

「ちょっとどうしようかなっていうか、戸惑いもありました」A

「産婦さんがいいお産になるように、これから関わっていこうという心持で話しかけていました」C

「お話をしてみてもか、まあお顔を合わせて状態をみてからは・・・そうですね。どのような方であっても、産婦さんを受け入れるというか、こういう方なんだというのを受け入れ・・・痛いのは皆さん一緒ですし、じゃあ痛いのをどう支えていこうかなというのを考えたりします」E

### 【産婦の今の状況への対応とその模索】

産婦のそばで助産学生は、陣痛の程度をじっくり観ながら、その対応を模索し、強い時は産婦に触れてさする、強い痛みと共に感しながら、産婦のいる場の雰囲気をよみ、基本的なケアを提供したことを語った。また、陣痛が落ち着いた状況を産婦の様子から判断し、落ちついた中での対話として助産学生が得たいと考えた、産婦に関する情報を尋ねたと語った。

「陣痛が来ている時だったら、先にさすったりして・・・産婦さんは今の状況に精一杯という感じで、苦しんでいるというか、それを和らげる方向に集中した方がいいと思い、表情みながら・・・していました」A

「マッサージしながら今辛いですよ、痛いですよって、共感していく中で、自分の戸惑いとか緊張も、関わっていく時間とともに減っていく感じでした」A

「腰をさすって、お水いりませんかとか、暑くないですかとか、汗出てないかなあとかみて、そんな基本的な関わりをしていました」B

「分娩室に入って、シーンとした中で痛みを迎えているときは、雰囲気を壊さないように、声のトーンを落として話しかけたりしてました」B

「まだお部屋にいる方だったら、陣痛はそんなに強くないし、赤ちゃんの性別とか聞いたりして」B

「落ち着いたときに改めて声かけすると、目線があって声のトーンも落ち着いていて」C

「落ち着いたときにひと呼吸整えてもらい、表情も楽になった時に話しかけると、産婦さんもこちらに興味を示し話しかけてくれる」C

「休憩時に得たい情報を聴きつつ、話ができる状態だったら、今の状態に特に関係のない、赤ちゃんの性別やご主人のこととか、そういうのを聴きながら接していきました」E

### 【産婦や家族との関係性構築の手がかりを得る】

産婦の状況をそばにいる家族とともに理解し、助産学生が行う産婦ケアの実際を、家族が肯定的に受け止め模倣しながら実施する様子を語った。産婦、家族の両者から助産学生のケア介入を了解してもらい、ケア提供者としての承認や受容について感じたことを話した。また、家族による産婦ケアの効果に気づき、そのケアに対する尊重や配慮、家族のケアを導くことについても話した。その一方で、自分自身が産婦とその家族のいる場に、受け入れてもらえることを期待していたと語った学生もいた。

「産婦が陣痛を迎える時、家族の方がいるときであれば、家族と合わせて、ああ来ましたねえと、モニターを覗ながら旦那さんと話して、ちょっと手助けしますねという風に、少しずつ身体を触ったりとかして工夫しました」B

「産婦さんに今こころ辺が痛いとか、痛いところを伝えてもらって、産婦さんにもどのくらいの力加減がいいとか、話してもらいながらこういう風にとやってみせたり、声をかけてやり始めてもらう時には、結構こうしたらいいんですよとか、こんな感じでいいんでしょうかと、皆さん関わって下さる(家族の)方がほとんどでした」A

「間歇時に息を吐くとか、こういう風にするといいですよという、旦那さんもこういう時はこうするんだとわかって、ほら今深呼吸だよって産婦さんにいってたり・・・」D

「家族の方にも一緒にご挨拶しているので、やっぱり産婦さんにもなんていうのか、警戒心とかもなく、えっと気持ち的にもいいのかなっていう風に思うんですけど、ご家族の方からああお願いしますといわれると、産婦さんもなんかちょっと笑顔がみられたりっていうのがあるので、なるべく産婦さんだけでなくご家族の方の表情とかを確認しながら関わるようにしました」C

「産婦さんの陣痛間隔が短くなったとか、今からこうなっていくですよという話をしていると、ご主人さんがこうなるんだって、頑張ろうとか、私の言ったことを受け取って、励みとして伝えているのを聞くと自分の意見が尊重されるというか、受け入れられているんだと思います」E

「自分が関わる時は初対面になるけど、やっぱり家族になるとすごい支えになるなって、表情とかも縋っているというか、何か手を握ったりする瞬間に表情が和らいで、やっぱり家族は違うなと思いました」A

「旦那さんも奥さんを支援しようと思っているか

ら邪魔しないように、旦那さんがマッサージしてないところをしたり、一緒に両親学級とか参加したのですかと聞いたりして」B

「私一人が産婦さんと関わっていると、家族の方は離れて座って、何もできないじゃないですけど、気持ちがいいものではないと思うので、産婦さんの今の状況を伝えたり、マッサージや水分補給とかしてもらったりしていました」C

「旦那さんが何していいかわからない様だったら、積極的に話しかけて、産婦さんと旦那さんの距離を縮めたりしていききました」B

「学生で自信はないですけど、心の中はドキドキしていますけど、こう背筋を伸ばし、表情を明るくいけば、受け入れて下さるかなと」D

### Ⅳ. 考察

学生は初対面の産婦への接近に緊張や戸惑いを感じながらも、産婦の今の状況を観察し、共感しながら必要なケアの方向性について模索した。特に陣痛の程度や産婦の反応に合わせた対応とその模索は、産婦に寄り添い、より近づくための重要なケアのきっかけとなった。学生は、産婦に付き添う家族の様子を気遣いながら、産婦の状況をそばにいる家族とともに理解すること、時に学生のできるケアをその場で実践し、ケア提供者として産婦に受容され家族にも承認されることは、産婦とその家族との関係性構築への手がかりを得ることに繋がった。その関係性の中で、学生は、家族とともに産婦の支えとなるケアに気づき、また分娩進行の見通しを伝えることで、家族の産婦へのケアが導かれ、その家族のケアが効果的であることを学んだ。これらが助産専攻の学生が気づいた産婦の支えとなる関わりであると考えられる。

今回の学生の関わりは、妊娠期からの継続した関わりではなかったが、本研究のインタビューへの参加から、産婦に寄り添うことでの観察力、産婦・家族に耳を向ける自己の姿勢の変化に気づく<sup>5)</sup>ことができたのではないかと考える。本研究を通して、産婦とその家族への接近過程、関係性の構築過程の中で、助産専門職を目指す学生の実習での経験の意味、テーマが抽出できたと考える。

### Ⅵ. 結論

助産学生が気づいた産婦の支えとなる関わりは、産婦とその家族の接近に焦点をあてて語られ、【産

婦との初対面を意識した態度】【接近時の学生の心情と心構え】【産婦の今の状況への対応とその模索】【産婦や家族との関係性構築の手がかりを得る】の4つのテーマが抽出された。

## 謝辞

本研究のインタビューに協力してくれた学生の皆さん、実習の場を与えて下さった病院施設の皆様、そして学生が受け持つことを承諾して下さった対象者の方々に深く感謝いたします。

本研究は第57回日本母性衛生学会学術集会(2016年)のポスターセッションにて公表した。

## Ⅶ. 引用文献

- 1) 江幡芳枝, 黒田緑, 小田切房子, 熊澤美奈好, 渡邊典子: 大学・短大専攻科・専門学校における助産師教育の実態と分娩介助・継続事例実習指針[その1], 助産雑誌, 61 (4), 344-351, 2007.
- 2) 渡邊典子, 小田切房子, 熊澤美奈好, 江幡芳枝, 黒田緑: 大学・短大専攻科・専門学校における助産師教育の実態と分娩介助・継続事例実習指針[その2], 助産雑誌, 61 (3), 226-232, 2007.
- 2) 牛之濱久代, 中島通子, 大平肇子, 日比千恵, 石川康代: 学生の分娩介助の同意にかかわる現状と産婦の想い, 母性衛生, 55 (1), p 190, 2014.
- 3) 常盤洋子: 出産体験の自己評価と産褥早期の産後うつ傾向の関連, 日本助産学会誌, 17 (2), p 36, 2003.
- 4) Sandelowski.M: The Problem of Rigor in Qualitative Research, Advances in Nursing Science,8, 27-37, 1986.
- 5) 谷口初美, 我部山キヨ子, 野口ゆかり, 仲道由紀: 助産実習と助産師教育の課題, 日本助産学会誌, 29 (2), p 283, 2015.